

附属学校園からのお知らせ いずみナーサリー



お茶の水女子大学附属いずみナーサリー（以下、ナーサリー）は、0～2歳児の乳幼児の通う小さな学内保育施設です。2002年に、前身である「いずみ保育所」が誕生。2005年にお茶の水女子大学附属いずみナーサリーとして、職員宿舎の一部を改築した、今の姿になりました。国立大学法人がこのような乳幼児保育施設を大学附属として設置・自立運営する例はとてもめずらしく、また、乳児保育の大切さの認識が深まりつつある時代性もあり、現場保育者・研究者・行政の方などいろいろな立場の方が国内外から見学に訪れることも少なくありません。

ナーサリーの大きな特徴のひとつは、保護者の必要性に応じて「日数選択制」をとっていることです。ナーサリーを利用する保護者は主に本学学生や教職員です。在園児全員が毎日通ってくる一般的な保

育園と大きく異なり、保護者の仕事や研究教育活動に応じて、月曜日から金曜日まで毎日やってくる子もいれば、週に1日だけ来る子もいます。通所日数の違いばかりでなく、一人ひとりの子どもの思い、子どもや保育に対する保護者の願いや心配のありようもいろいろです。私たち保育者は、それらいわば個別に生じる事柄にも丁寧に十分に応えたいと願いますが、同時に、あるいはそれ以上に、いろいろでありながらどの子も仲間の中でその子らしく豊かに育っていくための、連続性や統一性のあるカリキュラムの保証、「子どもが仲間とともに居るからこそいきいきと生活できる場」が実現することをめざしています。また、子どもたちの育つ姿に触れることで、大人も育ち、ひいては大学というコミュニティが生き生きと活力のあるものになっていくことにも寄与

したいと考えています。

ナーサリーには現在30余名の子どもが在籍し、保育者や年齢の近い子どもたちと一緒に一日を過ごしています。キャンパス内にお散歩に出かけ、皆で昼食やおやつを食べ、お昼寝をし、保育者に見守られて室内外でたっぷりと遊んで、0、1、2、3歳という人生の始まりの時代をその子らしく過ごしています。人の「生きることのありよう」をライフロングに見つめる知性の集積地たるお茶大にとって、小さな子どもたちが、「楽しく」「安心して」寝食を含む生活をする場が大学内にあることの意味は、決して小さくないのではないのでしょうか。「いずみ」は、すべてのいのちの源であるとして、元学長の本田和子先生（児童学）によって、

その名を与えられました。学内で最も幼い、最もみ



附属学校園での出来事 (2015年7月～9月)

【いずみナーサリー】

7月

- 七夕
- 木工ワークショップ
- 避難訓練(室内・地震)
- すいかわり

8月

- 避難訓練
- 夏野菜収穫・調理

9月

- 引き取り訓練
- お月見だんご作り

【附属幼稚園】

7月

- 5歳児遠足
- 誕生会
- 第一学期終業式
- 5歳児有志親子 チャボ・畑の世話
- 夜の附属幼稚園でセミの羽化を観察する会

8月

- ライフ×アート展参加

9月

- 第二学期始業式
- 学級懇談会
- 避難訓練
- 4歳児遠足
- 引き取り訓練

【附属中学校】

7月

- 第2回学力テスト(3年)
- 保護者会
- お茶の子バザー
- 志賀高原林間学校(2年)
- 夏休み開始

8月

- 夏休み終了

9月

- 第3回学力テスト(3年)
- 郊外園(2年)
- 保護者参観日
- 生徒祭

【附属高校】

7月

- 学力テスト(1年)
- 保護者会
- 東工大パネルディスカッション "Woman in STEM"
- ジャパンソサエティよりジュニアフェロー受け入れ
- 終業式

8月

- 東工大サマーチャレンジ
- アジア・ユースリーダーズ
- 物理学フィールドワーク@カミオカンデ
- 理数1日体験授業(中学生対象)

9月

- 始業式
- 学力テスト(3年)
- 第Ⅱ期教育実習
- 文化祭
- 第2回学校説明会
- 進路講演会(1年)

【附属小学校】

7月

- 保護者会
- 校外学習(1年)
- 火おこし体験(3年)
- 芝生補植(5,6年)
- 卒業生のお話を聞く会(5年)
- 飯ごう炊さん(5年)
- 終業式

8月

- 登校日(4,5,6年)
- 林間学校(4,5,6年)

9月

- 始業式
- 不審者対応訓練
- 保護者会
- 開校137周年
- お月見の会(2年)
- 保護者参観期間

附属学校園からのお知らせ

ずみずみしいのちたちが、今日もまた大学の中、いずみに集い、笑い、歌い、時に泣きます。ナーサリーは、幼い子どもとその傍らにいてくれる保護者のための、小さな小さな保育施設ですが、つながってくださる多くの方たちや、ふれあうすべての人たちにとっても、風通しのよい、陽のあたる“いずみ”でありたいと思っています。そして、子どもたちのはずむ声や姿が、たくさんの人に届き、その人たちが、生き生きと伸びやかに生きることにつながっていくとしたら、それはとてもうれしいことです。